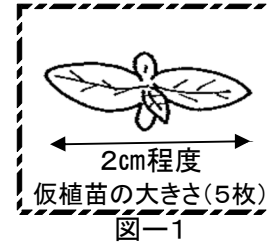


◆苗床管理のポイント:根作りを意識した苗床管理

1. 仮植時の注意点

- ①仮植苗は根張りの良い5枚苗を選んで仮植する。(図-1参照)
- ②仮植穴を大きくあけ、根が充分覆土されるように丁寧に仮植する。
- ③仮植しながらビニポットの苗の大きさを揃える。
- ④なるべく地積の大きいビニポットを使用する。  
(ビニポットの大きさは、地積の大きいものほど根量の多いがっちりした苗が生産される。)



2. 苗床管理上の注意点

- ①仮植後から活着までの管理: 仮植後活着まで4日程度かかる。  
 温度: 最適温度は20℃~25℃、夜間13℃程度(日中高温にならないようにハウス管理に注意する。)  
 水分: 活着までは親床と同程度の管理を行い、床面が乾かない程度に灌水する。  
 灌水の目安: 1日1~2回、3.3㎡当たり4~5ℓを目安に灌水する。  
 (合成肥土は松葉表土より保水性が高いので灌水は控えめで良い。)  
 日光: 仮植直後は遮光をして活着を促し、その後は昼間は床内を常に明るく保つ。
- ②活着後の管理: 活着後は順化处理を念頭に管理する。  
 温度: 最適温度は昼間20℃~25℃、夜間10℃~13℃  
 ・寒い日や風の強い日はスノ開けは避ける。  
 水分: 活着後は苗が萎凋しない程度を目安に灌水を制限する。  
 灌水の目安: 1日1回、3.3㎡当たり3~4ℓを目安に灌水する。  
 ・徐々に灌水を控え、夕方床面が白っぽく乾く程度に制限する。  
 ・過度の灌水制限は直根の伸長だけで、細根の発生を阻害させるので適度な灌水を心がける。  
 日光: 日中は直射日光を充分当て、ハウスのスノを開けて風に馴らしていく。
- ③順化处理: 移植10日前頃から順化处理を行う。(徐々に自然条件に近い状態にする)  
 1)温度: 日中はスノ換気とカタ換気を行いハウス内温度を外温に近い状態にする。  
 ただし、昼間のハウス内温度は20℃~25℃を保つ。  
 2)水分: 日中は葉がわずかに萎れるが、朝夕には回復する程度に制限する。  
 3)日光: 8時間程度の日長を与える。  
 ※注意 ・順化处理を行う頃(9枚苗の頃)から「花芽形成期」に入るので注意深い管理を必要とする。  
 (早蕾、過着葉防止:日中の温度管理が大切、昼間20~25℃を維持するようにハウス管理を行う。)  
 ・苗が互いに触れ合う頃になると急速に成長するので適期に移植ができるように本畑準備しておく。

3. 苗床で発生する病害防除(腰折病等)

・高温多湿条件で腰折病等の病気が発生しやすくなる。ハウス管理や灌水は適切に行う。

★薬剤散布について

○トップジンMの1,000倍かベンレート1,000倍液を、表土全体に薬剤が浸透するくらいの薬量を、被害が発生している部分を中心に、ジョーロで灌水をするような要領でたっぷり散布する。  
(ジョーロ等は除草剤の散布をしていないことを確認する。)

★注意: ○農薬使用基準を確認する

○晴天の日中散布は、薬害の恐れがあるので、午後3時以降に散布する。  
 ○他の薬剤との混合散布は、薬害の恐れがあるので絶対しないこと。

◆苗床の温度管理の注意点

※子床期間中に寒害、高温障害を受けることの無いようにハウス内温度管理には充分注意をする。  
 ★8℃以下の低温、30℃以上の高温で生育は停止する。  
 ★5℃以下になると寒害、35℃以上の高温で障害を受ける恐れがあり、40℃以上では高温障害を受ける。

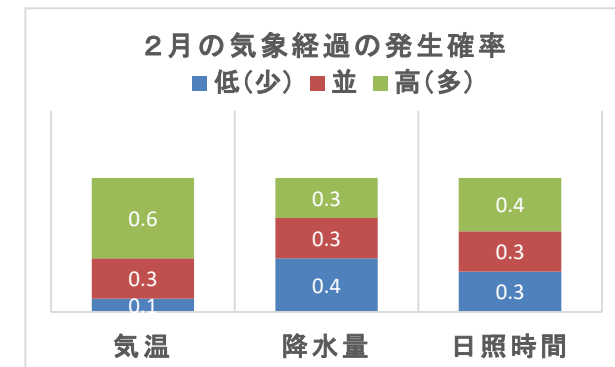
健苗を育成するには

- ・温度管理を適切に行うこと
- ・生長の程度に応じて灌水を制限すること
- ・できるだけ日光をあてること

注意深い観察と、こまめな苗床管理が大切

《予想される向こう1ヶ月の天気(2月1日から1か月)》

・平年と同様に晴れの日多い。気温は平年より高い確率60%、降水量は平年より少ない確率40%、日照時間は平年より多い確率40%。



(気象予報から考えられること)

・本年も昨年同様苗床期間中は気温が高い傾向で推移すると思われるので苗の生育は早くなると考えられます。また、日照時間は多い傾向で推移すると思われるので、育苗期間中は比較的好条件で推移すると考えられます。期間中の温度、水分管理をこまめに行い健苗の育成に努めて下さい。特に、順化处理時期に日中高温とならないよう注意して下さい。(過着葉防止)  
 ・苗の生育が早まれば移植適期も早まります。適期に移植ができるように気象予報等を参考にしながら、段取り良く本畑準備作業を行って下さい。(早作早進)

病害の発生・生育不振があったら速やかに耕作組合に連絡を！！

健苗の育成は「根張りの良い作柄」づくりの第一歩！

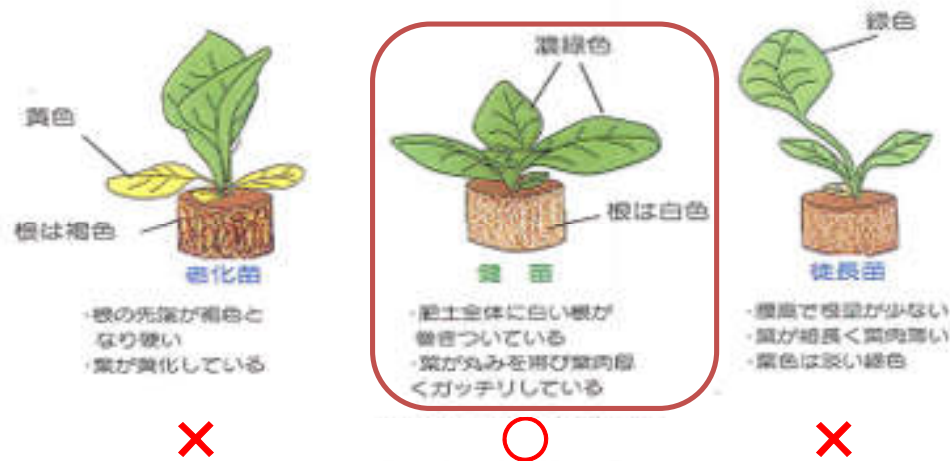
1. 適期・適切な移植：順調な活着で早作早進

◎根張りの良いガッチリした苗(健苗)の適期・適切な移植に努め、活着促進を図る。

◎移植は地域にあった最適時期に完了するように段取り良い作業を行う。

1) 移植に適した苗：葉数9～10枚苗(双葉から米粒大の心葉まで)

【健苗とは】



2) 移植の際の注意点：植付後の確認・手直しを確実に行う。

①植穴は、直径10cm～13cm、深さ13cm～15cm程度

・極端な浅植、深植は植付位置と施肥位置がズレて活着不良の原因となる。

②植付苗の抱土を露出させない

・抱土の乾燥や根が畦土に伸長しにくい状態が活着遅れの原因。

③移植時に植穴が埋まらないようにする。

・初期生育が遅れ、霜害や腰折れ病等の病害が発生しやすくなる。

④天気の状態を見極めて移植作業を行う。

・北西風の強い、寒い日は活着が悪く、早蓄性になる危険性が高い。

・移植の翌朝、降霜が予想される場合は午後3時迄には終了する。

翌朝の最低気温が2℃以下が予想される日は霜害を受ける可能性が高い

★早蓄や霜害を防ぎ、作柄を揃えるためにも「適正な移植」が大事な作業となる。

【参考:「べんとう肥」について】

・ネリ畦気味のほ地や施肥作業の遅れたほ地等に移植する際は、活着促進を図るため(施肥後2週間を経過していないほ地)

「べんとう肥」を検討してください。

(べんとう肥の方法)

・移植前日または移植直前に苗床にたっぷりと灌水した後苗床1坪当たり加燐硝酸100gを、水10リットルに溶かした液をジョーロで均一に散布する。

★初期生育不振は遅作・品質低下の原因、注意深く観察！早く気づき、適切な対応を行う。

2. 移植後のほ地管理について：根張りの良い作柄づくり

★移植から35日程度は葉たばこの根群発達期で、根張りの良い作柄づくりのために大切な時期です。

1) 排水対策の徹底：排水不良は根群の発達阻害

●排水溝の設置・点検：二段排水溝の設置



《排水対策の徹底を！》

2) 干ばつ時の灌水実施：過度の水分不足は根群の発達阻害やI型グレーの発生要因

●昨年作は本畑初期～中期の降水量不足が根群の発達不良やグレー葉生出の要因になったと考えられる。

3) ほ地の見回り点検

①ドリフト(農業飛散)危険ほ地の確認

・他作物が隣接する場合はドリフト対策を実施する。

(周辺農家との話し合い、障壁物の設置、のぼり旗の設置等)

②ジャガイモほ地隣接確認

・タバコほ地の周辺にジャガイモほ地がないかの確認とその対策の実施

・掘り残しイモの有無や小イモの処分場所が近くにないかの確認とその対策の実施

③マルチ片の回収徹底

・回収活動強化週間の設定

・ほ地単位での回収袋の設置

「早作早進」と「根づくり」を意識した作業で充実した作柄を形成し、収量確保に努めましょう！

(葉たばこ技術開発協会: 雑学教室より抜粋)

たばこが本畑へ移植された直後は、畑の肥料を吸収する力がないので、10日～2週間くらい苗床で吸収した体内の養分と、苗の抱土に含まれる肥料成分で生活しなければならない。この時期に窒素不足となると初期生育が遅れ、後々の生育まで影響する。移植後30日目頃の生育状況は移植後10日目頃の栄養状態で決まる。「べんとう肥」は移植直後の栄養状態を良好に保ち、初期生育を順調に行わせるためのスターターとしての効果がある。

生育不振を見つけたら耕作組合に連絡を！

◆移植後35日程度は根部発達期、この時期に十分な根群をつくるのが「充実した標準作柄」形成に最も大切な作業です！

《当面の作業上の留意点》

1. 生育不良株、腰折れ病等の病害株がないかを確認

◆本畑の見回りを適宜行い、早く気づき処置する。

★生育不良株への対策

・植穴に加燐硝安液(1%液)を1株当たり200ml程度かん注する。

(加燐硝安1kgを水100ℓに溶かした液：10a当たり400ℓ程度)

・畦立て時の土壤水分が多かったほ地や、施肥後移植までの期間が短かったほ地等については注意深く観察し、生育不良株を確認したら適切な対応をしてください。

2. 排水状況の点検確認の実施

★「根群形成」「病害予防」のため排水対策を徹底する。

★降雨後のほ地の見回りを実施し、排水溝の設置、補修を徹底する。

・ほ地内への流入を防ぎ、ほ地外への排水を図るためにほ地周囲、枕地に排水溝を設置する。  
(二段排水溝)

・近年、集中豪雨や連続降雨が多発する傾向になっています。「根いたみ」を防止し、立枯病、疫病等の病害防止のためにも集中豪雨や連続降雨に対応できる排水対策を実施してください。

3. 根作りを意識した土寄せの実施

★不定根の発達を促し、上位葉の充実を図る。

★土寄せ後は必ず確認して手直しする。

・ローラー土寄せの場合は特に注意する。

・ローラー土寄せの際モザイク病の伝搬に注意する。

★株元まで寄りにくい畦内土壤のほ地の対応

・合成肥土か土壌を土入れして穴埋めする。

(地際部からのわき芽も発生しにくくなる。)



\*株元までしっかりと土寄せ

4. 本畑初期での損害対応について：慌てず、速やかに対応を！

★霜害:被害程度の確認にとどめる・・・被害の程度を見極めて対応策を実施

・霜害対応はあわてず、その後の生育を見て判断する。

★風害:例年4月中旬～下旬にかけて強風が発生・・・損害に対応した管理作業

・葉の折損等被害を受けやすいほ地には防風ネット等の防風対策を実施する。

◆損害が発生したら速やかに耕作組合に連絡をしてください。



ほ地ごとに現場で対策を検討

5. タバコ黄斑えそ病(PVY)対策について(たばこ耕作日誌P41参照)

★ジャガイモ隣接ほ地はアブラムシの飛来予防対策が重要。

★モモアカアブラムシの飛来温度・・・気温の上昇とともに飛来増加

・午前9時の温度が12℃以上で飛来を始め、20℃以上で最も多くなる。

★薬剤による防除対策：使用基準の確認(使用回数、使用間隔等)

・PVY防除はジャガイモ農家と地域での一斉防除が効果的

※薬剤による防除対策については、耕作日誌P41に記載してある「農薬防除対策」を参照してください。

《参考》

本年の長期予報では3月～5月にかけて気温が高い傾向で推移すると予想されています。アブラムシの発生も早くなったり、多くなることが予想されますので、アブラムシが媒介するたばこ黄斑えそ病やキュウリモザイク病の発生には充分注意し、早めの防除を心がけ、発生防止対策を徹底してください。

6. ドリフト(農薬飛散)対策について(たばこ耕作日誌P7参照)

★例年4月中旬～下旬にかけて強風があり、この時期にドリフト(農薬飛散)事故が多く発生している。

・被害者・加害者にならないよう充分注意をしてください。

★他作物と隣接する場合はドリフト対策を実施する。(危険ほ地)

【ドリフト対策】

・ドリフト防止注意喚起「のぼり旗」の設置(耕作組合より配布済み)

・隣接する農家との話し合い、協調を図る。

・障壁物(ネット等)の設置をする。

◆万が一事故が発生した場合は速やかに耕作組合へ連絡してください。

7. 異物(マルチ片)混入防止について(たばこ耕作日誌P9参照)

【マルチ片対策】

・ほ地内のマルチ片回収徹底

・回収活動強化週間の設定

・マルチ片回収袋の設置

「根づくり」と「病災害防止」で収量確保！目標収量250kg

◆ 疫病・赤星病・灰色かび病等の糸状菌病害は、例年大きな減収要因となっています。

「耕種的防除」と「適期適切な薬剤防除」の確実な実施で、糸状菌病害の発生を防止し、収量確保に努めましょう！

1. 耕種的防除について

病害防除はまず第一に病害が発生しにくい環境づくり！

耕 種 的 防 除		
①排水対策の徹底	・排水溝の点検、補修を確実にを行う。（雨天日の見回り）	・集中豪雨、連続降雨に対応できる排水対策
②ほ地内外の衛生管理の徹底	・残さ（わき芽、除去葉等）のほ地外持ち出しを確実にを行う。	・病害発生、拡散防止
③ほ地周辺の雑草除去	・病気、害虫の寄主植物をなくす。	・うどんこ病菌、アブラムシ等
④雨天日の収穫回避	・病害が発生したら雨天日の収穫は極力控える。	・疫病の拡散は特に激しい
⑤作業機の洗浄	・作業は病害の発生していないほ地から行い、病害の拡散を防ぐ。	・AP-1使用時は特に注意



【排水不良ほ地】

排水対策は  
根群形成、  
病害防除の  
基本作業

2. 薬剤防除について

糸状菌病害は発生前の予防が効果的！病徴を見逃さず、早めの防除が大切！

- ◆ 殺菌剤は予防的効果が大きい・・・ 気象予報等を見ながら計画的に防除する。
- ◆ 茎葉散布剤は葉の表裏に充分かかるように丁寧に散布する（AP-1で薬剤防除する際は、垂直散布が効果的）

＜薬剤防除例＞

※同一病害に対する農薬の使用回数は2回以内であるため、下記農薬を効果的に組み合わせる。

※農薬の使用にあたっては耐性菌の発生を防ぐために「RACコード」を考慮しながら効果的に組み合わせる。（RACコード：農薬使用基準「名称」の〈 〉内に記載）

対象病害	農薬名称剤型	適用病害	使用時期	処理方法	ポイント
疫 病	ユニフォーム粒剤	疫 病	大土寄期 (4月下旬まで)	株元散布	・1株当たり、3～4gを株元に散布する (リドミル粒剤は使用禁止です。注意してください。)
	オラクル顆粒水和剤	疫 病	収穫10日前まで	株元灌注 土壌表面 散布	・横搔2回終了直後に灌注(1株に2000倍液を200mlずつ確実に灌注) ・横搔1～2回終了直後に2000倍液を10a当たり200ℓ～400ℓ畦間土壌 表面散布(葉に飛散しないようノズルに飛散防止用のカバーを装着する)
	カッパーシン水和剤	疫 病	収穫10日前まで	茎葉散布	
	ブリザード水和剤	うどんこ病・疫病	収穫10日前まで	茎葉散布	・薬害が出やすいので散布には充分注意する(夕方散布)
	アグリマイシン100水和剤	空洞病・野火病・疫病 角斑病	収穫3日前まで	茎葉散布	・100mm程度の降雨が2～3回あった時タイミングを見て散布 ・豪雨や台風接近が予想される時(2～3日前)に散布
赤星病 灰色かび病	アミスター20フロアブル	赤星病・菌核病	収穫10日前まで	茎葉散布	・横搔3～4回終了後、葉の表裏にたっぷりと散布
	ポリオキシシンAL水和剤	赤星病・灰色かび病	収穫5日前まで	茎葉散布	・中葉系に発生したら早めに散布(初発を見逃さない) ・収穫までの日数を考慮して薬剤を選択する
	ポリオキシシンAL水溶剤	赤星病・灰色かび病	収穫5日前まで	茎葉散布	
	ベルコート水和剤	赤星病・灰色かび病・うどんこ病	収穫10日前まで	茎葉散布	
	エコショット水和剤	灰色かび病	収穫3日前まで	茎葉散布	

・例年5月中旬には糸状菌病害の発生が見受けられます。計画的防除で発生防止に努めてください。

◆「薬剤防除」にあたっては、防除効果の低減や、農薬使用基準逸脱につながる恐れがあるので「農薬使用基準」を必ず確認し、遵守してください！

【参考：農薬の処理方法について】

- ・株元散布(ユニフォーム粒剤)：茎葉に飛散しないように株元に散布する。
- ・株元灌注(オラクル顆粒水和剤)：茎葉に飛散しないように株元に灌注する。(畦内に注入する)
- ・土壌表面散布(オラクル顆粒水和剤)：茎葉に飛散しないように土壌表面に散布する。(畦間処理)

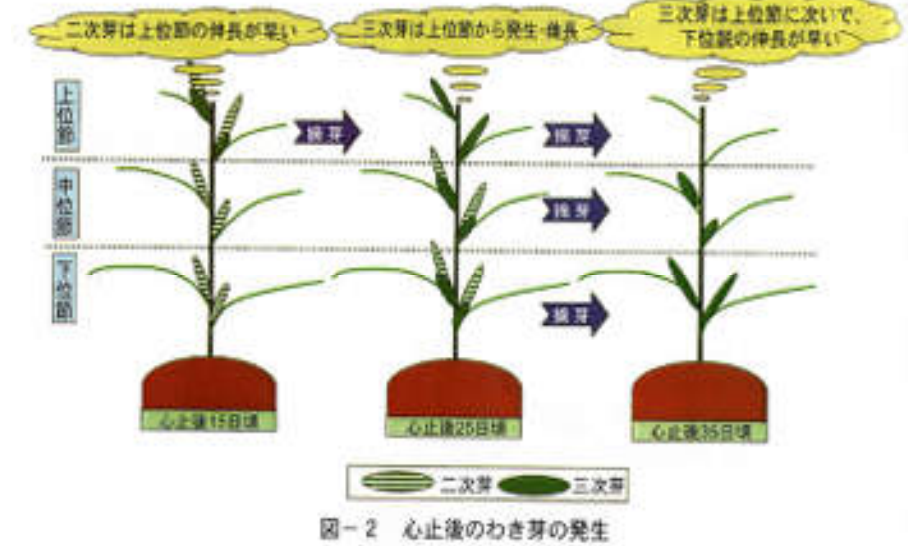
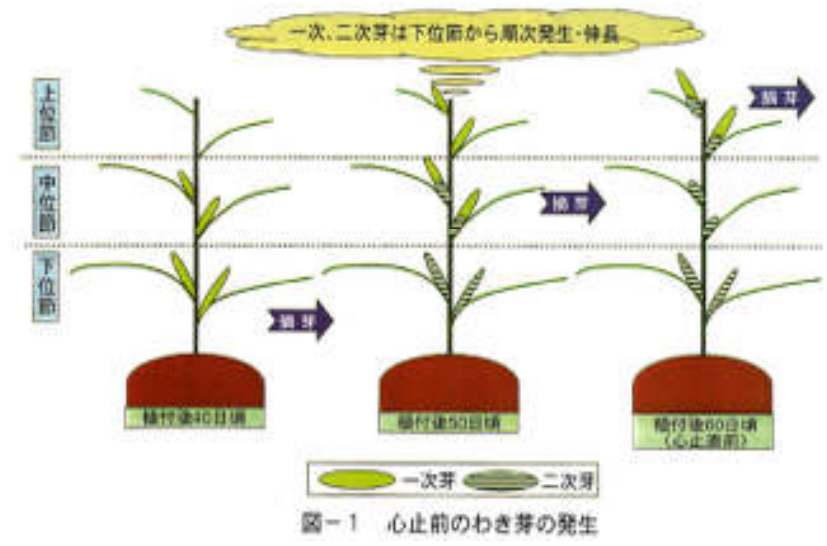
農薬使用にかかわる詳細については  
「よくわかる!たばこ用農薬ガイド」を参照してください。

◆葉たばこの順調な成熟と充実にかかわる重要な作業です。わき芽除去は適期を逃さず、効果的に実施しましょう！

1. わき芽の特徴

- ①わき芽を放置しておくと、養分がわき芽の成長に奪われ、葉たばこの品質・収量が低下する。
- ②ひとつの節から3回(1次芽～3次芽)発芽する。
  - 1) 1次芽、2次芽は下位節から順次発生し伸長する。
  - 2) 2次芽は上位節の伸長が早い。
  - 3) 3次芽は上位節から発生し伸長する。
  - 4) 3次芽は上位節に次いで下位節の伸長が早い。
- ③心止め後は、上位節のわき芽の発生・伸長が旺盛

わき芽の発生状況と摘芽処理の目安



わき芽の発生パターンを考慮し、効果的な摘芽作業を実施してください。

2. 1回目わき芽除去(手作業)のポイント

- 1回目のわき芽取り(手作業)の際に、土寄せの不十分な株は手直しを行い、しっかり株元まで土寄せする。
  - ・不定根の発根促進と接触剤散布に伴う不定根の焼け防止のため株元までしっかり土寄せすることが重要
- 特に「JT77」は、わき芽が固いので1回目のわき芽取り(手作業)は、早めに実施する。

3. 接触剤の効果的使用：接触剤は接触しないと効果なし！(わき芽の発生状況を注意深く観察：丁寧な散布と先手先手がコツ)

- 心止前のコンタクト使用：特に丁寧に散布し、1次芽を焼き、その後のわき芽伸長を遅らせる。(以降の作業が楽になる。)
  - ・散布はわき芽の大きさが米粒大の頃が最適で、あまり大きくならない時期(3cm以下)に行う。
  - ・草丈が40～50cm(一升瓶の高さ)の頃からコンタクトを散布する。(その後のわき芽管理を大きく左右する：タイミングの見極めが重要)
  - ・1回目のコンタクト散布は薄め(40～50倍)で散布量が少量でも効果がある。(散布の際は薬液が芯部にかからないように注意：右図参照)
- ※薬液が地際部へ流れ落ちるような多量な散布は、根や茎を傷め、倒伏や立枯病発生の原因となるので要注意！
- 心止め後の接触剤使用：心止めすると二次芽が旺盛に急速に発生伸長する。わき芽の伸長を見極め適期を逃さず散布する。
  - ・わき芽発生後の日数が経過するほど伸長速度が速まる。したがって心止め後の早い時期に散布することが大切。
  - ・3次芽は上位1～2節が急速に伸長するのでタイミングを逃さないよう注意する。

芯部に極端に近づけて散布すると毛じを伝って薬液が逆流し、薬害が発生する。



●接触剤の使用法：「たばこ用農薬の使用基準」により、使用方法、遵守事項等を確認する。

使用時期	使用薬剤	使用回数
心止前	コンタクトのみ使用可	2回以内
心止後	コンタクト単用	4回以内
	コンタクト・イエローリボン併用	イエロー2回以内 αコンタクト1回

※収穫時期と重なります。収穫作業を優先させるためにも、受委託共乾を積極的に活用してください。

《参考》「接触型わき芽抑制剤」の効果を最大限に発揮させるには希釈方法も大切な作業です！

- 薬剤本来の効果が低下する方法
  - ・薬剤原液をそのまま散布液収容タンクの中に入れて直接ホース等で水を注入したり、水をあらかじめ入れておいた後に薬剤を投入して棒でかき混ぜる等の方法。
- ◎ 薬剤本来の効果を低下させない方法(調整後6時間以内に散布)
  - ・薬剤原液をバケツ等の容器に入れ、ほぼ等量の水を加えた後、棒で激しく攪拌して十分に乳濁化させる。この乳濁液を散布液収容タンクに移し、徐々に所定量の水を加えながらよくかき混ぜて散布液とする。

1. 適正な心止

栄養生長から順調な成熟生長へ移行するための大切な調整作業 : 適期適正な心止が順調な成熟を促す

① 心止の目的

・開花結実に必要な養分や水分の頂上への移行を防いで葉の展開をはかり、内容成分を蓄積させ、成熟を促進する。

※心止め後、上位葉が開帳して樹勢が旺盛になり、その後順調な成熟過程に移行するように心止時期や心止位置を考慮して適期に作業を行う。

(ピアダル型の作柄を目指した心止の実施。)

・適正な心止が根群の発達を促し、葉肉を充実させる。(浅すぎても深すぎてもダメ)

(「根張りの良い作柄」形成のための最終調整作業)

② 心止の方法

・標準作柄は、花軸が完全に伸びてから、開花1輪の頃第1花枝葉とも3枚程度切除する。(右図参照)

(収穫葉数17~18枚確保することを目安にして切除位置を決める。)

・大柄作は開花10輪の頃若干浅止めにする。(第1花枝葉とも1枚もしくは花軸のみの切除)

(花を咲かせ過ぎたり、わき芽を伸ばし放題にしない:晩作化の要因)

・栄養不良の作柄は、さきがけ花が白味を帯びた(節間が定まった)頃、深止めにする。

③ 作業上の注意点

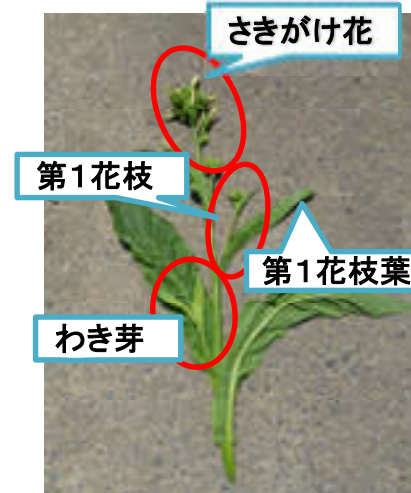
・個々の畑の地力、耕土の深浅、施肥量、作柄の樹勢等を考慮して切除位置を決める。

・ほ地の60%~70%が標準状態になったとき行う。不揃いのときは2回に分けて行い成熟を揃える。

・曇雨天が続く時は仮止め(花蕾のみを切除)を行い、天気回復を待って止め直す。

・モザイク病や黄斑えそ病が発生しているほ地は、最初に健全株の心止を行い、その後に病害株を行う。

※用心のため浅止めしたほ地で、その後心配がないと判断した時は、早めに切り直すか頂上葉を除去する。



【心止位置:第1花枝葉とも3枚切除】



【心止後の作柄】

《参考》

・本年は植付け以降気温が高い傾向で推移しているため葉数は確保されるところと考えられます。収穫葉数を考慮しながら「浅止め」にならないように心止め位置を決定してください。  
(中葉系の枯上がりを防止し、充実を図ることが大切です。)

2. 病虫害対策の徹底 … 「技術情報:4、5」参照

① アブラムシの飛来が多くなる時期 : 黄斑えそ病、モザイク病対策として防除を心掛ける。

② 糸状菌病害対策も万全に! : 排水溝の管理、残さの持ち出し等耕種的防除を徹底し、さらに計画的防除に努める。

※本年は本畑期間を通して気温が高く、梅雨時期は降水量が多く、大雨の恐れもあると予想されています。病虫害の発生しやすい気象条件になると考えられます。

3. 接触剤散布 及び わき芽除去作業 … 「技術情報:5」参照

☆ 心止めすると、わき芽の伸長が旺盛になる : 引き続き、段取りよく適期に実施

(接触剤はわき芽に接触しないと効果がないので、丁寧な散布に努める)

4. 異物混入防止に心掛けましょう … 5S3定の徹底

① ほ地でのマルチ片回収と収穫、吊り込み時、取ろし・荷作り時の葉元確認、包の確認

② 吊り込み前の乾燥室のパネル点検、清掃の実施

※本年から「出荷規格不適合包」については廃棄相当品以外は返戻対象となりませんが、処置手数料が徴収されます。「出荷規格不適合包」の発生が無いように充分注意してください。

《参考:九州南部の気象予報》

◆向こう3か月の平均気温は高い確率50%、降水量は多い確率40%  
4月:天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は平年並みまたは高い確率ともに40%、降水量は少ない確率40%  
5月:天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は平年並みまたは高い確率ともに40%、降水量は平年並みの確率40%  
6月:平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。気温は平年並みまたは高い確率ともに40%、降水量は平年並みまたは多い確率ともに40%

「価格の平準化」を踏まえて、「完全収穫」により「収量・品質の確保」に努めましょう。

1. 旧下葉収穫(収穫の開始)

- ☆心止め前に全面積収穫を目標とし、完全収穫に努め収量確保を図る。
- ・旧下葉は早く生まれており発蕾期以降の収穫で乾燥仕上がり大きな支障はない。
- ・中葉の充実を図り、2回目以降の取り遅れ防止のためにも早めの収穫に努める。
- ・大柄、遅作であっても下葉は早めに収穫を行い、風通しを良くして上位葉の充実を促進させる。

◆本年作は植付け以降比較的好天に恵まれ、生育も早いようです。中葉系の成熟も早まると考えられるので、取り遅れの無いよう計画的な収穫に努めてください。

2. 価格の平準化を考慮した収穫(耕作日誌P5参照)

- ①中葉の価値向上を意識した収穫の実施
  - ・「広く、浅く」の収穫で完全収穫と包内斉度の向上:横かぎ1~2枚を遵守
  - ◆目標:横かぎ収量10a当80kg以上
- ②上葉の価値向上を意識した収穫の実施
  - ・上葉区分3~4枚程度:特に総かぎ開始時期の上葉区分は注意
- ③タイプ別収穫の徹底(A,B間価格差の拡大対応)
  - ・作柄タイプ別、病災害葉別の区分収穫徹底:特に立枯病葉の区分

3. 各着位、回期別の収穫方法と熟度兆候の見極め

着葉位置	葉分	収穫回期	収穫枚数	適熟葉の徴候および収穫の目安			
	上葉 3枚程度	総かぎ	10枚	<p>◆完全収穫が前提:総かぎ終盤の消耗や収穫ロスが無いようにする。 (計画的収穫作業の実践:収穫終了時期の目安設定)</p> <p>・栽培面積、乾燥施設等を総合勘案し、収穫適期に最大限収穫できるように総かぎ開始時期を決定する。</p> <p>◆心止後50日程度を目安にして開始時期を決める</p> <p>・総かぎ開始の目安 ... 本葉の最上位葉の中骨の白化を確認(本葉はAタイプの熟度を担保)</p> <p>・総かぎ残葉数の目安 ... 熟度の促進と若返り防止を考慮する。 ※樹勢・地力・施肥・新連作地等を勘案 ... 目安 → 総かぎ枚数10枚程度</p> <p>・拾い取りの実施 ... 流れそうな合葉だけを拾う(収量に大きく影響) ※若返り防止のため無理な収穫はしない(老化した葉であれば若返らない)</p>			
	本葉 5枚程度				横かぎ5回目	1~2枚	・熟度を担保し、葉先の枯れと中骨の白化(表面が平らとなりミゾができる)を確認して収穫
	合葉 5枚程度				横かぎ4回目	1~2枚	・熟度を担保し、葉先の枯れと中骨の白化を確認して収穫 (樹勢の弱い小柄作は生地感のあるうちに収穫)
					横かぎ3回目	1~2枚	・熟度を担保し、取り遅れがないように注意しながら完全収穫
	中葉 3枚程度				横かぎ2回目	1~2枚	・取り遅れがないよう早めに収穫(発蕾以降は収穫可能)
	旧下葉 2枚程度				横かぎ1回目	1~2枚	・心止め前に全面積を目標
					注意	<p>「商品意識」の徹底を!</p> <p>◆早期販売がなくなり中葉系の貯蔵期間が長くなっています。取りおろし、貯蔵管理には充分注意をしてください。</p> <p>◆販売前の確認を行い、必要な包については手直しを行ってください。(販売見込み票の作成)</p> <p>◆本年から「出荷規格不適合包」は「廃棄相当品」以外返戻対象となりませんが、「処置手数料」を徴収されます。 (基本事項説明会資料「出荷規格不適合包の処置区分および処置手数料の設定について」:P9~P11参照)</p>	

『広く・浅くの収穫』  
で着位を揃える。  
(包内斉度向上)

◎梅雨時期を迎え、病災害の発生しやすい時期となりました。各種病災害の発生・拡大は、例年大きな減収要因となっています。

引き続き以下の注意点を参考に**病災害予防対策の徹底**と**完全収穫**により「**収量・品質の確保**」に努めてください。

※本年は記録的に早かった梅雨入りの影響で「疫病・灰色かび病・赤星病・立枯病」等の主要病害の発生が早く、また6月中旬から下旬にかけて梅雨前線が活発化し、降水量が多くなると予想されています。今後主要病害の発生・拡散が懸念されますので、油断することなく注意深い観察と早めの対策を実施してください。

1. 病害対策：「疫病・灰色かび病・赤星病」の糸状菌病害対策の徹底：まずは発生させない対策を！・・・「技術情報:4」参照

◆耕種的防除の徹底：病害防除の基本的作業！

耕種的防除対策	内 容
①排水対策の徹底	・降雨時、降雨後の見回りを行い排水状況を確認し、排水対策を徹底する。(排水不良は根群の発達も阻害する。)
②衛生管理の徹底	・収穫時の黄葉やわき芽等は必ずほ地外へ持ち出し、処分する。(病害の発生源除去と被害の拡大防止)
③拡大防止対策の徹底	・発病したほ地は「降雨時にはほ地内に入らない」「葉が濡れた状態では作業しない」「作業機の洗浄」等注意深い作業を行う。(特に「疫病」発生ほ地は要注意)

◆計画的薬剤防除の実施：糸状菌病害は発生前の予防が効果的！

薬剤防除対策	内 容
①効果的薬剤防除の実施	・農薬による効果的な予防対策を実施する。発病してからは効果が低く、 <b>使用時期・使用量は「技術情報:4」を参照</b> して計画的に実施する。 ・農薬の散布にあたっては葉の表裏にたっぷりかかるよう散布する。(AP-1使用の際は垂直散布機を使用し、速度は高速-1) ・農薬の使用にあたっては「 <b>農薬使用基準</b> 」を <b>しっかり確認し</b> 、遵守する。(作業日誌への記帳)

(赤星病の初期症状)



(灰色かび病の初期症状)



- 糸状菌病害は強風雨、連続降雨等により一気に発生が拡大し、**収量・品質に甚大な影響を及ぼします。**
- ・作業時によく観察し、発生兆候を見逃さないように注意し、早めの対策を実施してください。
- 本年は糸状菌病害の発生が例年より早く、今後、病害の拡散が懸念されます。

2. 完全収穫に向けて：価格の平準化を考慮しながら作業遅れがないよう、完全収穫に努め収量確保を図る！・・・「技術情報:7」参照

- ①「広く浅く」の収穫実施：取り遅れのないように着位区分を確実にし、包内斉度の向上と収量確保を図る。
- ②合葉の拾い取りの実施：収量確保のためにも収穫ロスがないよう総かぎ前の合葉の拾い取りを実施する。赤葉(黄葉)は捨て過ぎに注意する。
- ③立枯病罹病葉対策：グジリ取りの徹底と当日吊りこみの実施。立枯病の兆候を早めに見極め、活力のあるうちに収穫をする。(共乾を活用し、完全収穫に努める。)
- ④総かぎ時期の判断：総かぎは上位本葉の熟度兆候を確認して実施する。梅雨明けは平年より早いと予想され、その後は厳しい暑さが見込まれるので消耗、ロスのない収穫を心がける。
- ⑤上葉区分の徹底：上葉は3~4枚を目安に区分する。本年作は上位葉が例年より開張がみ。上葉の本葉への取り込みに注意する。(価格の平準化を念頭においた収穫の実施)

【今後の気象予報:ウェザーニュース：5/21発表】

- ・記録的に早かった梅雨入りの影響で梅雨期間は平年より長くなる見込み。
- ・西日本では6月中旬から下旬にかけて降水量が多くなる見込み。**大雨に警戒が必要。**
- ・梅雨明けは九州から関東甲信越にかけては**7月上旬頃**の予想。
- ・今年の夏(6月~8月)の平均気温は平年並みまたは高く、降水量も平年並みか多いと予想。

(今後の気象予報から考えられること)

- ・**主要病害の発生・拡散防止対策を徹底する。**
- ・**梅雨明け後の高温、強日射に伴う消耗、収穫ロスが無いように計画的な作業を実施する。**